かがやき

～一人一人のウェルビーイング～

かんがえる
がんばる
やさしく
きたえる

時津町立鳴鼓小学校
学校だより　Ｒ６年度第４号

令和６年６月３日
文責：校長　今井大輔

やり遂げた運動会

５月１９日(日)、晴天の下に行われた運動会は、大成功でした。閉会式の時に子供たちへ尋ねました。「自分の力を出し切った人？」全員が手を挙げました。

閉会式でも話しましたが、自分の力を出し切って、人と競い合う。ハラハラやドキドキ感を味わう。そして、達成感や充実感、また、悔しい思いをする。これらが、スポーツの醍醐味であり、良さでもあります。そしてこれも幸福感であり、ウェルビーイングなのです。

勝って嬉しいのは当たり前。しかし、負けて悔しい思いであっても、達成感や充実感はあります。そこが大事です。学級対抗リレーや団体種目では、練習過程で自分たちで作戦を立てたり、何度も自主練習をしたりして、学級がまとまっていきました。結果は１位でなくても、結果発表で拍手をしている子供たちの顔は、みんなでゴールできたことへの達成感が表れていました。得点種目だけでなく、表現運動や応援合戦でも、やり終えた時には、充実した表情を見せていた子供たちでした。

今年のびわは大豊作！

４年生が、４月に自分たちで袋がけをしたビワの実を、地域の皆さんに丁寧にやり方を教えていただきながら、収穫しました。今年のびわは豊作でした。収穫しているうちに食べたくなった子供たち。その場での試食ＯＫを出すと、かぶりついていました。もぎたてのびわは、本当に甘くておいしくみんな笑顔でした。初めて食べた子もいましたが、みんな「おいしい！」と興奮していました。学校に帰ってからは、袋を外して、仕分け作業をしました。全校のみんなに（希望者）おすそ分けもできました。摘果作業や袋かけ、周りの除草作業も含め、左底シニア会の皆様、ありがとうございました。

今年もありがとうございます！

今年度も水泳の学習に向けて、５、６年生がプール掃除を行いました。５年生が２４日(金)にプール周りを、６年生が３１日(金)にプール内をきれいにしました。この２週間中に、左底の出原さんと元村の村本さんが、自前の高圧洗浄機を持ってきて、壁面や溝、プールサイドのふたなどをきれいにしてくださいました。子供たちの手だけでは、きれいにできない所なので、とてもありがたい限りです。

つぶやき

「順調すぎて怖いぐらいです。」運動会の準備段階や当日に本校の体育主任が口にしていた言葉である。今年度は、ＧＷ後は、一度も雨に降られることなく、計画通りに練習や準備ができた。なかなか珍しいことである。本番当日もトラブルなく、順調に進み、予定より少し早めに終了することもできた。これも、先生方の子供たちへの事前指導のおかげと、子供たちの自主的な動きの良さからである。

それに運動会は、学校の教職員と子供たちだけで成り立っているわけではない。ＰＴＡ本部役員や保護者の皆さんの協力なくしては運営できない。毎年、本部役員は、早朝より入校車両の整理や案内をしてくださっている。事前に学校側から入校する際の許可証の発行に関してはアナウンスをしているが、当日、許可証を持たないまま車両で来校してくる場合もある。様々なことに対応しなくては、校門付近や駐車場は混乱をまねきかねない。職員は、競技や子供たちの指導でそこまでの人員配置ができないので、本当にありがたいことである。

また、今年度も運動会終了後のテント撤去を、約２０名程の保護者が手伝ってくださった。昨年度は、「お手伝いお願いします！」と放送したが、今回は、声をかけなくても自主的に手伝ってくださったのである。本当に嬉しかった。テントの撤去は、子供にとっては危険を伴う作業となるので職員がやるしかない。その事からもとても助かった。自ら気付き、動くことのできる保護者であるから、自主的な動きができる子供に育っているのだろうと思う。

みんなちがって みんないい～（Ｒ６その１）
～共生社会をめざして～

昨年度に引き続き、特別支援教育について、保護者と地域に皆様に発信させていただきます。前年度まで、「特別支援教育」と「発達障がい」についてお伝えしてきました。昨年度までの内容に加え、新たな情報をお伝えしていきます。

学校の中には、知的な発達に遅れはなく、普段の生活では問題が無さそうに見えるのに、授業中「じっと座っていられない」、「点数や勝敗にこだわり、間違えたり失敗したりするとパニックになる」、「友達と対等で友好な関係が築けない」「コミュニケーションが取りづらい」など、困り感を抱えてしまう子がいます。

他にも「環境が変わったり、初めてのことに戸惑ったりして、慣れるまでに時間が掛かってしまう」、「計算は得意なのに、字を読むとたどたどしかったり、読めても内容が理解できていなかったり」、「漢字の読み書きや計算、図形の理解が他の子供に比べると極端に苦手で遅れが見られる」など、実はまだまだたくさんあります。

これらの子供の中には「発達障がい」と言われる子供たちがいます。

このような困り感の原因は脳の機能障害に起因しますが、一見すると何も問題が無いように見えるため、「我慢が足りないから」、「本人の努力不足」、「親の躾が悪い」などと誤解されがちです。この誤解が、「必要以上に厳しく躾ける」、「周りから低く見られる」要因となり、「素行不良」や「精神疾患」などの２次障害に繋がることも少なくありません。

主な発達障がいは、LD（学習障害）、ADHD（注意欠如/多動症）、自閉スペクトラム症がよく知られています。他にも「発達性協調運動症」や「選択性緘黙（場面緘黙）」「知能が平均よりも高過ぎる高知能」など、発達障がいと呼ばれる症状は多くあります。

令和４年度に全国の公立小中学校で実施した調査の結果、通常学級に、発達障害の可能性のある児童生徒が８・８％いることが分かりました。１０年前の前回調査より２・３ポイント増で、３５人学級なら３人の割合になります。

「発達障がいは大人になれば治る」とか、「子供の時だけ」とかいう話を耳にすることがありますが、成人にも発達障がいの方はたくさんいます。気付いていないだけということが多いのです。

ところで、以前テレビやネットでも話題になった児童精神科医 宮口幸治さんの「ケーキの切れない非行少年たち」という書籍をご存じでしょうか。筆者の宮口さんは、医療少年院や女子少年院で勤務され、窃盗・恐喝、暴行・傷害などの犯罪を犯した少年少女たちと関わる中で､その多くが、丸いホールケーキの絵を３等分できないことや、彼らの多くが、犯罪の理由や被害者のことを考えて内省することができなかったから、非行少年たちの多くは、「発達障がい」や「知的障害」をもっていることに気付きます。このような経験から宮口さんは、学童期に適切な支援を受けることがなかったため、本人や周りの人々に種々の困難が発生することを説かれています。つまり、犯罪者や被害者を減らすためには、発達障がいの可能性がある子供たちに対する早期発見及び、個に応じた適切な支援と理解が重要であるということを述べられています。

障がいは三つの要素「インペアメント（欠損）・ディスアビリティ（能力不全）・ハンディキャップ（社会的不利）」から構成されていて、発達障がいは「ハンディキャップ（社会的不利）」であると言えます。「特別支援教育」に対して負のイメージをお持ちの方が多いと思いますが、「理解」と「支援」により、子供の可能性は広がります。「平成」から「令和」に変わるとともに、時代は大きく変わっています。個性を尊重し、個別に能力を伸ばしていくことがこれからの時代を生き抜く力になります。

子供の将来をより良く変えていくためには、保護者の方々、家族、教育者、地域全体が協力し、考え方をアップデートしていくことが大切です。

※参考文献　「みんなちがって　みんないい」
大村市立大村小学校　木村　栄指導教諭

（文責　特別支援Ｃｏ　山下　健一）